2025

HARVARD-YENCHING

INSTITUTE WORKING

PAPER SERIES

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本における
アリスの冒険

AUTOETHNOGRAPHIC FICTION: ALICE'S ADVENTURES IN MULTILINGUAL JAPAN

Aoyama Waka | The University of Tokyo

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険
Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Waka Aoyama (The University of Tokyo)

Abstract: These essays are the first drafts of the chapters for an autoethnographic fiction titled *Fustuno Maruchiringaru (An Ordinary Multilingual)*, scheduled for publication in 2027. From June 2024 to February 2027, approximately 20 chapters, including a prologue and an epilogue, are planned to be written in Japanese. The work is based on the author's personal experiences and follows a character named Alice, born and raised in Japan, whose first language is Japanese. The story portrays Alice's everyday use of multiple languages. While Japan is often misunderstood as a "monolingual society," the work shows that it is, in fact, a "multilingual society," and it challenges the concepts of "ordinary" and "equality" in postwar Japan from the perspective of language use. Themes such as diversity, coexistence, colonial and wartime aggression, and the power of language are explored, with a narrative of homeland loss and regeneration. The work encourages critical reflection on our unawareness of the privilege of "Japanese" and "English" and the linguistic hierarchies we live with, aiming to bring out the reader's own "language stories." Grounded in critical metalinguistic awareness, it seeks to explore the possibilities of creating a socially just world. In order to prepare for the publication of a future English edition and to explore the impossibility of translation, English translations of all chapters are included.

Keywords: Multilingual Japan, Language Use, Being Ordinary/Normal and Egalitarianism, Colonial and Wartime Aggression, Critical Metalinguistic Awareness

要約：これらのエッセイは、2027 年度に出版予定の『ふつうのマルチリンガル』という自伝的民族誌的フィクション作品の各章の初稿である。2024 年 6 月から 2027 年 2 月にかけて、プロローグ、エピローグを含む約 20 章が日本語で執筆される予定である。本作では、著者自身の経験に基づき、日本生まれ日本育ち、母語が「日本語」であるアリスという人物が、日常的に多言語を使う様子を描く。日本が「モノリンガル社会」と誤解されがちである一方、実際には「マルチリンガル社会」であることを示し、戦後日本における「ふつう」や「平等主義」を言語使用の観点から問い直す。多様性、共生、歴史的加害性、言葉の力をテーマに、故郷喪失と再生を描く。とくに「日本語」や「英語」の特権性や言語的ヒエラルキーに無自覚なわたしたちに対する批判的反省を促し、読者自身の「言語の物語」を引き出すことを目指す。批判的メタ言語意識を軸に、社会的公正な世界への可能性を探る一冊である。将来の英語版の出版に備えるために、また翻訳不可能性を探るために、全章の英訳を付す。

キーワード: マルチリンガル社会としての日本、言語使用、ふつうと平等主義、歴史的加害性、批判的メタ言語意識

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険

東京大学東洋文化研究所
青山和佳

4　高倉 Takakura シダは道を見つけだす

先生が前にいる

七歳のとき、地面がとつぜん消え、宙に浮かび、音もなく闇のなかへと落ちていった。

小学校三年生のとき、わたしたち家族は、七号館をでて、電車でいくつか行ったところにある、高倉（たかくら）という地区の古い一軒家に引っ越した。これまで大学のなかに住んでいたわたしは、このとき、わたしをいつも包んでいてくれた、あの森という存在から切り離されてしまった。森に包まれていることが当たり前の状態で育ってきたために、わたしはもはや森の外に出てしまっているということに、そのとき、まだ気づくことすらできなかった。じっさいには、森は、わたしについてきており、それはわたしをこんどは内側から見守ってくれることになったのだけれど、もちろん、そのことにも、まだ気づいていなかった。ただ、福島からついてきたシダの声はよく聞こえていた。

シダは、わたしが初めて学校（地元の公立だった）というものに行ったときにも、後ろからついてきてくれた。クジャクの羽のように放射状に葉を広げていて、それはよくみると黒褐色で艶のある細くて硬い軸から生えている小さな羽が集まってできている。神聖な佇まいで、魔物から守ってくれそうなのに、そうでもあり、そうでもなかった。シダは危険を察知したり、ときには未来を透視して、静かに警告してくれるものの、そこからどのように感じたり、考えたり、動いたりするか、教えてくれることは決してなかった。アリス、hush, 静かに、それは自由というものなのだよ、と語りかけてくる。一年生として初めて教室に入ったとき、シダは、小葉を固くして、ささやいた。「言葉を、一時的に、失うかもしれない」。

教室は四角いかたちをしていて、そこにはやはり四角いかたちの机と椅子がいくつもあり、教室の前のほうにある黒板に向かってきちんと並べられていた。黒板も四角いかたちだったし、教室の後ろのほうにある、生徒一人ひとりが持ち物を置けるように区切られている棚もまた四角いかたちだった。ここでは、空気も四角いかたちをしていて、わたしを外側から締め付けてくる。たまらなくなって、わたしはできるだけ窓の近くの、できるだけ後ろの、つまりそのほうが自分の前にスペースが広がるように感じられるか

ら、そういう場所の床にぺたんと座りたかったのだけれど、「先生」であると名乗るひとが、あなたは名前が「あ」から始まるから出席番号がいちばんね、いちばん前の、廊下のほうの席に座りなさい、と命じる。

「ちがいます、先生、my name starts with A」、とは言えなかった。だって、どのみち先頭にされてしまう。

ぽかんとしていたら、「先生」が、さあ、こちらに来て、座りなさい、と優しいけれど、逆らうことは許さないという四角い空気をまとってせまってきた。こんなことは、幼稚園ではなかったことで、わたしはただただ驚いていた。先生が前にいる、それもずっとそこにいて、わたしに何かをしなさいと言いつけてくるなんて、すぐには信じられなかった。けれども、わたしはこの驚きを言葉にしたり、叫びながら逃げ出したりすることができずに、こころの奥のほうにある小さい箱に入れて、それを見ないですむようにしっかりと閉じ込めた。つぎの日、わたしはおたふく風邪になり、一週間、学校を休むことができた。シダがささやく。「生き物はなんとか生きぬく。道は見つかる」。

英語が見つからない

わたしは、なんだかとてもつまらなくなってきた、教室で机にシダと並んで座っていても、何もすることがなかった。先生から配られた本を一、二度のぞいてみたけれど、さし絵にはキラキラ光る小さな星も、ハンプティ・ダンプティも、ジャックとジルもいなければ、アルファベットで書かれた会話もなかった。なによりもそれは、英語ではなかった。そこに書かれている文字をわたしは読むことはできた。けれども、わたしは、その文字が好きではなかった。それは日本語で、教室では「国語」と呼ばれていて、わたしたちの前に立った先生が読み上げて、そのあと、わたしたちは声を合わせて読み上げたり、ひとりずつ当てられて読み上げたりする。つまらなくてたまらない。

そこで、ぼうっとして考え始めた。春の温かい日だから、とっても眠くて、ぜんぜん頭がはたらかない。でも、シロツメクサで花かんむりを作ったら楽しいかも。いや、ちがうな。いまは、桜の花が咲いていて、ピンクの花びらが風に舞って、空には青い空が広がっている。空気はぽかぽかしていて、草や木からは新しい芽が出てきているし、小鳥たちが楽しそうに歌っている。自然がどんどん目をさましていく感じ。そう、シダだって、土のなかの茎から赤ちゃんが小さな手をにぎったような新しい芽が伸びてきて、そのあと、葉がゆっくり広がって成長していく。開き切る前の若い葉の先にすこしだけ残っているカールがとてもかわいらしくて見とれてしまう。

と、そのときのことだった。とつぜん、ピンク色の目をした白いオポッサムが、ササっと、そばを駆けぬけていった。それはたいしてめずらしいことではなかったし、オポッサムが、「たいへんだ！　たいへんだ！　遅刻だ！」と、ひとりごとを言っているのを耳にしたときも、べつに変だとは思わなかった（あとになって考えてみると、幼稚園のときにアリスの絵本[1]を読んでもらいすぎていたにしても、ものすごく変だとわかるのだけれど、そのときは何でもないように思えたのだった）。でも、オポッサムがなんとエプロンから時計をとりださず、だからもちろんそれをちらりと見ることもないまま、ふわあっと走り去ったとき、わたしはびっくりして立ち上がった。

「なにこれ？　どうして時計を見ないの？」と思ったわたしは、オポッサムを追いかけて校庭に走り出した。すると、オポッサムがツゲの木の生垣の下にある大きな巣穴に飛び込むのを見て、わたしもふわあっと飛び込んだ。どうやって出るかなんて全然考えていなかった。シダが言っていたから、生き物は困っても道を見つけるものだって思っていたから。だから、わたしは気をつけることもなく、気がついたときにはもうしっかり落ちていた。シダはついてこなかったみたい。オポッサムの穴は、最初はまっすぐ進んでいて、そのあと急に深い洞窟みたいに下がっていった。わたしは落ちながらまわりを見たり、これからどうなるのか考えたりする時間がたっぷりあった。

洞窟のなかの図書館

洞窟のなかを見上げると、岩壁にはたくさんの戸棚や本棚がびっしり埋め込まれていて、地図や絵がぺたぺた貼られているのが見えた。落ちながら、棚からひとつのびんを手に取ってみると、「オレンジではないマーマレード」ってラベルがついていたけど、中は空っぽでちょっとがっかり。もし、びんを落としたら下にいる誰かに当たって大変なことになるかもしれないから、落ちながら棚に押し戻した。「うわあ！」ってわたしは思った。こんなに落ちても平気だなんて、もしかして空から落ちても大丈夫なんじゃないかな？　おかあさんが、「なんて強い子だろう」ってほめてくれるかもしれないけど、わたしは言わない。だって、自慢しちゃダメって教わったから。雷さまの怒りに触れないように。

どんどん下に落ちていく。これって終わりがないのかな？　「もうどれくらい落ちたかな？」ってわたしは声に出して言ってみた。「もうすぐ地球の中心を通りすぎるはず。そこはすごく熱くて固い。地球の真ん中には固い鉄の玉があって、そのまわりにはとろとろの鉄やニッケルが流れていて、そのおかげで地球がマグネットみたいな力を持って

[1] つぎの二冊。Carroll, Lewis. 1865. *Alice's Adventures in Wonderland*、および同. 1871. *Through the Looking-Glass, and What Alice Found There.*

いるはず」（アリスは、図鑑でそう習ったばかりだった。誰も聞いてないから、知識を自慢するのにはよいチャンスではなかったけれど。復習するのはすごくいいことだよね。そもそも、おかあさんに戒められているから、自慢することはできないはずなのだけど）。「うん、そんな感じかな、このまま地球を突き抜けると、チリのパタゴニアに出るかな？」

ふわあと突き抜けると、草原でも氷河でもなく、図書館が広がっていた。壁にはびっしりと本棚が並び、どの本もすべて日本語で書かれていた。わたしは、そこで立っている、ハートの女王に目をうばわれた。女王は冷たく微笑んで、「さあ、この本を読みなさい」と言った。わたしは仕方なく、本を開いて声に出して読むことにした。その本には「みんな」という言葉がやたらと多く出てきて、ページをめくるたびにどんどんわたしの気持ちがねじれていくような気がした。何かがおかしい。でも、言葉にできない。それなのに、女王は黙ってわたしを見つめ続けている。どうしてこんなことをしなきゃいけないのか、全くわからないのに、わたしは読み続けた。

女王に命じられるまま、わたしは古い机に座った。そこには山のように原稿用紙が積まれていて、縦書きだった！　「あなたの気持ちや内面は、絶対に書いてはいけないのよ」と、女王は厳しい顔で言った。わたしはその言葉にしたがって、お花や木、出てくる人たちがどんな顔をしているか、どんな動きをしているか、声がどんなふうに聞こえるか、おはなしを一生懸命に書きはじめた。疲れても原稿用紙は増えていき、朝も夜も分からず書き続けた。ときどき女王が後ろからのぞき、「もう少しくわしく書きなさい」と髪を力まかせに引っ張る。だんだん何を書いているのかわからなくなっていく。空の色も風の音も紙に描かれていくのに、わたしのこころは何も映さない。

マリールビーのお茶会

「アリス、目を覚まして、戻ってきて」
シダに揺り動かされて、目を開けると、四角い教室に戻っていた。
知らないうちに、四年生になっていたみたい。

「アリス、目を覚まして、ついてきて」
シダに引き寄せられて、目を開けると、七号館の庭に戻っていた。
知らないうちに、青いドレスを着ていたみたい。

「アリス、目を覚まして、こっちだよ」
シダに抱き寄せられて、目を開けると、栗の木の下に戻っていた。
知らないうちに、大きなテーブルに座っていたみたい。

「アリス、目を覚まして、あいさつして」
シダにうながされて、目を開けると、マリールビーが座っている。
知らないうちに、うちのネコと再会していたみたい。

「アリス、目を覚まして、こんにちは」
シダにうながされて、目を開けると、ふんわりふわふわハチワレ猫。
知らないうちに、頭を擦りつけられていたみたい。

「アリス、目を覚まして、お茶を選んで」
シダにうながされて、目を開けると、マリールビーが笑っている。
知らないうちに、銀色の茶筒が差し出されていたみたい。

「アリス、目を覚まして、ポットを見て」
シダに抱き寄せられて、目を開けると、透明のティーポット。
知らないうちに、静かに茶葉がくるっていたみたい。

「アリス、目を覚まして、お茶を飲んで」
シダに引き寄せられて、目を開けると、透明のティーカップ。
知らないうちに、静かに紅茶がうずまいていたみたい。

「アリス、目を覚まして、お菓子を食べて」
シダに揺り動かされて、目を開けると、記憶のマドレーヌ。
知らないうちに、紅茶に浸してしまっていたみたい。

マリールビーは、そう、わたしとおとうとの初めての、
家庭教師で、わたしたちがなにをしても、にゃ、と鳴くだけで、
ある日をさかいに、雪のようなシーツに包まれて、青いお空に消えていった。

こころのなかの森

Unya、もう一回、言わせてね。
オーケイ、permettez-moi de le répéter[2].

---

[2] フランス語。

七歳のとき、地面がとつぜん消え、宙に浮かび、音もなく闇のなかへと落ちていった。Pag-ka pito nako ka tuig, kalit lang nawala ang yuta, ug nalutaw ko sa hangin, nga walay tingog nga nahulog sa kangitnit.

ハートの女王が、わたしの大事な英語のレコードと絵本を捨てた。引越しのためだと言われたけど、気づかなかった。部屋を片づけている間も、それがどこかにあると思っていた。気づいたとき、頭が真っ白になり、家のなかを探しまわったけれど、見つからない。絵本とレコードが戻らないなんて、からだが空っぽになったようで、声も出なかった。泣きわめきたかったのに、一粒の涙も出ない。思わず女王をにらんだ。女王は冷たい顔でわたしを見て、腕をつかんだ。わたしが声を上げると、髪をつかまれて洞窟のなかを引き回された。洞窟の壁が冷たく、わたしは震えていた。女王はゆっくりと体が消え、最後に暗い目だけが残り、その目も薄れていき、完全に姿を消した。

シダがすうっと現れて、わたしを抱き起こしてくれた。アリス、静かに。聞いて。わたしたちは、乾燥がひどくなると、ちょっとした魔法を使う。たとえば、葉っぱをくるりと巻き込んで、水分をしっかり守る。こうすると、まるで眠りに入るみたいに、乾いた風から身を守れる。葉っぱを巻くときは、みんなで寄り添ってひっそりと静かに過ごす。そして、雨が降るまでじっと待っている。ほら、見てごらん。わたしたちの葉っぱは少し厚くて、乾燥してもあまりしおれない。大きな根っこも地面の深いところまで伸びていて、隠れた水を探し出す。わたしたちは、いつも強いわけじゃないけれど、こうやって静かに、でも確かに生き延びている。どんなに乾いた風が吹いても、わたしたちはきっと生き残れる。そう言って、シダはまだ消えてしまった。

ここは洞窟だけれど、森へのドアがあるはず。古い机をよく見ると、小さな金色の鍵が置いてある。そうそう、この鍵で小さなドアを開けようとするけれど、からだが大きすぎて通れないから、「アリス」は「飲めば小さくなる」魔法の飲み物を見つけて飲んで小さくなるのよね。でも、こんどは鍵を机の上に置き忘れてしまって、取れなくなってしまって、それからどうなるのだっけ。ああ、そうそう、「アリス」は「食べたら大きくなる」ケーキを見つけて食べるのだけれど、体が大きくなりすぎて通れなくなってしまって、それからどうするのだったかしら。ええと、わたしは自分のサイズを調整して、再び小さくなって、ドアを通り抜け、やっと森へ出られる、はず。Stay brave, Alice!　と声に出してみた。

すると、目が覚めたようだった。外は夏で、わたしは四角い教室の四角い机に四角い気持ちで座っていた。先生は変わらず前に立ち、「国語」の授業を続けていた。わたしだけは、氷のなかにいる。すっかり凍っていて、話したり動いたりできないけれど、セー

フよね、I ‘m fine. 夏休みには、絵日記を毎日つけなければならないらしい。わたしは知っていた。八月になると、ハートの女王が、わたしと弟を海辺の街に住むおじいちゃん（おとうさんのおとうさん）のところに送り込み、毎日、ハガキに「今日の出来事」を書いて、おかあさんに送るよう命じることを。このおじいちゃんは、夜になって、お酒を飲むと不思議な力が湧き、長い刀で見えない魔物とたたかう。わたしたちは、月に逃げるはめになる。You know, I don’t like it at all!

ああ、目が覚めたばかりなのに、もうとても眠くてたまらない。だって、眠っていなければ、起きていられない。ああ、森へ行こう。咲いている野ばら(Rosa multiflora)が赤くぬられていたら、わたしが白くもどしてあげよう。

Autoethnographic Fiction: Alice's Adventure in Multilingual Japan

Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo
Waka Aoyama

Chapter 4: Takakura—The Fern Finds Its Way

The Teacher Stands Before Me

At seven, the ground beneath me disappeared; I floated, then plunged silently into darkness.

In third grade, our family moved from Building No. 7 to an old house in Takakura, a few train stops away. Having lived within the university's embrace, I was severed from the ever-present forest that had enveloped me. Accustomed to its constant presence, I didn't realize I had stepped outside its bounds. In truth, the forest had followed me, now watching over me from within. But I hadn't noticed that yet. Only the fern's voice from Fukushima remained clear.

The fern accompanied me on my first day at the local public school. Its leaves fanned out like a peacock's tail, each leaflet sprouting from a glossy, dark-brown stem. It exuded a sacred aura, as if to ward off evil—though not entirely. The fern sensed danger, sometimes glimpsed the future, offering silent warnings. But it never dictated how to feel, think, or act. "Alice, hush," it whispered. "This is what freedom means." As I entered the classroom as a first-grader, the fern stiffened its leaflets and murmured, "You might temporarily lose your words."

The classroom was a square, filled with square desks and chairs aligned toward the square blackboard at the front. Even the cubbyholes at the back, designated for each student's belongings, were square. The air itself felt square, pressing in from all sides. Overwhelmed, I longed to sit on the floor near the back window, where space seemed to open up before me. But the person who introduced herself as "teacher" said, of course, in Japanese, "Your name starts with 'A [a],' so you're number one. Sit at the very front, by the hallway." （あなたは名前が「あ」から始まるから出席番号がいちばんね、いちばん前の、廊下のほうの席に座りなさい）

I couldn't protest, "That's not right, teacher. My name starts with 'A' /eɪ/in English." (ちがいます、先生、my name starts with A). Either way, I'd be placed at the front.

As I stood there, bewildered, the teacher approached gently yet firmly, enveloped in that square air, insisting I sit. This was unlike anything in kindergarten. The idea of a teacher perpetually standing before me, issuing commands, was hard to grasp. Unable to express my shock or flee, I

tucked it deep into a small box within my heart and sealed it tight. The next day, I came down with mumps and missed a week of school. The fern whispered, "Living beings find a way to survive. The path will appear."

I Can't Find English

Sitting beside the fern in class, I grew increasingly bored. Peeking into the books handed out by the teacher, I found no sparkling stars, no Humpty Dumpty, no Jack and Jill, no dialogues in the alphabet. Most importantly, they weren't in English. I could read the characters, but I didn't like them. They were in Japanese, referred to as "kokugo"（national language）in class. The teacher read aloud, and we echoed in unison or took turns reading individually. It was unbearably dull.

So, I began to daydream. It was a warm spring day, making me sleepy and sluggish. Perhaps making a clover crown would be fun. No, cherry blossoms were in bloom, pink petals dancing in the breeze under a blue sky. The air was warm, new buds sprouting from grass and trees, birds chirping joyfully. Nature was awakening. Even the fern, with baby shoots emerging from its underground stem, slowly unfurling its leaves. The slight curl at the tip of the young leaves was endearing.

Then, suddenly, a white opossum with pink eyes dashed past me. It wasn't unusual, and hearing it mutter, "Oh dear! Oh dear! I'm late!" didn't seem odd either. (In hindsight, perhaps I had been read "Alice" picture books[3] too often in kindergarten, but at the time, it felt normal.) However, when the opossum didn't pull out a watch from its apron and simply ran off, I was startled and stood up.

"What's this? Why isn't it checking the time?" I thought, chasing the opossum out to the schoolyard. Seeing it dive into a large burrow beneath the boxwood hedge, I leaped in after it without considering how I'd get out. The fern had told me that living beings find a way. So, without caution, I found myself falling. The fern didn't seem to follow. The opossum's tunnel initially went straight, then suddenly descended like a deep cave. As I fell, I had ample time to observe my surroundings and ponder what lay ahead.

The Library Within the Cave

---

[3]Lewis Carroll's *Alice's Adventures in Wonderland* (1865) and its sequel, *Through the Looking-Glass, and What Alice Found There* (1871).

Looking up inside the cave, I saw numerous cupboards and bookshelves embedded in the rock walls, adorned with maps and pictures. While falling, I grabbed a jar labeled " Marmalade Not Orange," but it was empty, which was disappointing. Fearing it might hit someone below, Still falling, I reached out and placed it gently back on the shelf. "Wow!" I thought. Falling this much without harm—maybe I could even survive a fall from the sky? Mom might praise me, saying, "What a strong child," but I wouldn't boast about it. After all, I was taught not to brag, to avoid incurring the wrath of the thunder god.

I kept falling. Would this ever end? "How far have I fallen?" I said aloud. "Soon, I'll pass through the Earth's center. It's extremely hot and solid there. At the core lies a solid iron ball, surrounded by molten iron and nickel, giving Earth its magnetic field." (Alice had just learned this from an encyclopedia. Though no one was listening, it was a good chance to review. Besides, Mom had warned against boasting.) "Yes, if I keep falling, I might end up in Patagonia, Chile."

As I passed through, instead of grasslands or glaciers, I found myself in a library. Walls lined with bookshelves; every book written in Japanese. There, the Queen of Hearts caught my eye. She smiled coldly and said, "Now, read this book." Reluctantly, I opened it and began reading aloud. The word "everyone" appeared excessively, and with each page, I felt increasingly twisted inside. Something was wrong, but I couldn't articulate it. Still, the Queen silently stared at me. I had no idea why I had to do this, yet I kept reading.

Following the Queen's orders, I sat at an old desk piled high with manuscript paper—vertically ruled! "You must never write about your feelings or inner thoughts," she said sternly. Obeying, I diligently wrote about flowers, trees, people's expressions, movements, and voices. Even when tired, the manuscript pages multiplied, and I wrote endlessly, unaware of day or night. Occasionally, the Queen would peek from behind, pull my hair forcefully, and say, "Write in more detail." Gradually, I lost track of what I was writing. Though the color of the sky and the sound of the wind were depicted on paper, my heart reflected nothing.

Maryruby's Tea Party

"Alice, wake up and come back,"
The fern shook me gently, and I opened my eyes to find myself back in the square classroom. Apparently, I had become a fourth-grader without realizing it.

"Alice, wake up and follow me,"
The fern pulled me close—suddenly I was in the garden of Building No. 7.
Apparently, I was wearing a blue dress without realizing it.

"Alice, wake up and come here,"
The fern embraced me, and I opened my eyes to find myself under the chestnut tree.
Apparently, I was sitting at a large table without realizing it.
"Alice, wake up and say hello,"
The fern nudged me, and I opened my eyes to see Maryruby sitting there.
Apparently, I had reunited with our old cat without realizing it.

"Alice, wake up and say good day,"
The fern urged me, and I opened my eyes to a soft, fluffy tuxedo cat.
Apparently, it had rubbed its head against me without my noticing.

"Alice, wake up and choose your tea,"
The fern prompted me, and I opened my eyes to see Maryruby smiling.
Apparently, a silver tea canister had been offered to me.

"Alice, wake up and look at the pot,"
The fern held me close, and I opened my eyes to a clear teapot.
Apparently, tea leaves were swirling inside it.

"Alice, wake up and drink your tea,"
The fern pulled me near, and I opened my eyes to a transparent teacup.
Apparently, the tea was gently spiraling inside.

"Alice, wake up and have a treat,"
The fern stirred me gently, and I opened my eyes to a madeleine steeped in memory.
Apparently, I had already dipped it into my tea.

Maryruby—yes, our very first tutor—
No matter what we did, she only meowed in reply.
One day, wrapped in snowy white sheets, she vanished into the blue sky.

The Forest Within My Heart

Unya, let me say it again.
Okay, permettez-moi de le répéter[4].

At seven, the ground beneath me disappeared; I floated, then plunged silently into darkness.
Pag-ka pito nako ka tuig, kalit lang nawala ang yuta, ug nalutaw ko sa hangin, nga walay tingog nga nahulog sa kangitnit.

The Queen of Hearts had thrown away my precious English records and picture books. She said it was for the move, but I hadn't noticed. Even while packing, I thought they'd turn up somewhere. When I realized they were gone, my mind went blank. I searched the house frantically, but they were nowhere. Their absence hollowed me out, left me voiceless. I wanted to scream and cry, but not a single tear would come. I glared at the Queen. She stared back coldly, grabbed my arm. When I cried out, she yanked my hair and dragged me through the cave. The stone walls chilled me to the bone. Slowly, her body faded. At last, only her dark eyes remained—and then they, too, vanished.

The fern appeared softly, lifting me into an embrace. "Alice, hush. Listen. When drought deepens, we work a quiet magic. We curl our leaves inward to preserve moisture, like sleeping through dry winds. In those times, we gather close and wait for rain. Our leaves are thick; they hardly wilt. Our roots stretch deep to find hidden water. We're not always strong, but this is how we survive—quietly, surely. No matter how dry the wind, we endure." And with that, the fern disappeared again.

This is a cave, but there must be a door to the forest. On the old desk, a small golden key lay waiting. Yes, with this, I would try to open the tiny door—but I was too big to fit through. "Alice" drinks the potion that shrinks her, right? But then, she forgets the key on the desk and can't reach it anymore. What happens next? Oh yes—she eats the cake that makes her grow, but then she's too big again. Eventually, she balances her size, becomes small once more, and passes through the door into the forest.

"Stay brave, Alice!" （勇気をもって、アリス！） I whispered aloud.

Suddenly, I felt awake. It was summer. I sat at a square desk in a square classroom with a square feeling. The teacher was still standing in front, continuing our "kokugo" lesson. Only I was frozen, as if trapped in ice. I couldn't move or speak—but I was safe, right? I'm fine.（大丈夫）

---

[4] French.

Apparently, I'd have to write a picture diary every day during summer break. I already knew: in August, the Queen of Hearts would send my brother and me to our grandfather's coastal town, and make us write postcards to Mother every day, describing what had happened.

This grandfather—Father's father—grew magical at night with drink in hand, fighting invisible monsters with a long sword. We'd be forced to flee to the moon. You know, I don't like it at all! （わかるよね、すごくいやなの！！）

Ah, I've just awakened, but already I'm unbearably sleepy. Because unless I'm dreaming, I can't stay awake. Let's go to the forest. If the wild roses (Rosa multiflora) bloom red, I'll gently turn them white again.